

エミール・クラウスとベルギーの印象派



エミール・クラウス「野の少女たち」1892年頃
photo:Hugo Maertens

■ 尊経閣文庫名品展

— 国宝 水左記を中心に —

■ 夏休み親子で楽しむ美術館

みる・きく・かたる

■ 古九谷とその展開

■ 石川の工芸Ⅱ

- 第2回 日展石川会展
- 企画展Topics 俵屋宗達と琳派
- 展覧会回顧 国宝 薬師寺展
- 8月の行事予定



「竜のハナ唄」 庄田常章
夏休み親子で楽しむ美術館 みる・きく・かたる

エミール・クラウスとベルギーの印象派

主催：北陸中日新聞、石川県立美術館、石川テレビ放送
7月26日(金)～8月25日(日) 会期中無休

1F企画展示室

観覧料

一般 一、一〇〇円(九〇〇円)
大学・高校生 七〇〇円(五〇〇円)
中学・小学生 五〇〇円(三〇〇円)
(一)内は二十名以上の団体料金
六十五歳以上の方、障害者手帳をお持ちの方は団体料金

講演会

八月十一日(日)午後二時
「印象派 ～フランス・ベルギー・日本～」
講師：富田章氏
(東京ステーションギャラリー館長)
場所：県立美術館講義室
先着一〇〇名(聴講無料)

まばゆい光の中に映し出される、移ろいゆく自然を明るい色彩で描き、その後の美術運動に大きな影響を与えた印象派は、連作「睡蓮」が名高いモネやルノワールの甘く美しい女性像など、日本でもよく知られています。本展は発祥地フランスとは違った、独自の発展を遂げたベルギー印象派と、その中心人物であったエミール・クラウスをご紹介します。

画家、グラフィックアーティストとして活躍したエミール・クラウスは、フランドルの西部ワレヘムの小さな村で生まれ、アントワープの美術学校で学びました。当初は古典的な作風で、フランスでも高い評価を得ていましたが、印象派に大きな刺激を受け、光の探求・描写を理想にかかげた「ルミニスム(光輝主義)」のグループ「生と光」を

結成し、多くの画家たちが参加しました。
ベルギーでは神話や聖書でなく、自分たちを取

り巻く現実―自然を描写する写実主義が比較的早くから生まれており、印象派受容の土台はできていました。当時最先端の前衛美術であった印象派は、ベルギーでは急進的な芸術運動というよりも自然描写法として、学術的な方法を確立していた新印象派とほぼ同時に受け入れられ、土着の写実主義と相まった独特の表現が生まれました。

本展ではエミール・クラウスと、ルミニスムに賛同した画家たちの作品に加えて、ベルギー印象派に多大な影響を与えたフランス印象派の、モネやピサロの作品、さらにクラウスに師事した二人の日本人画家、児島虎次郎と太田喜二郎を展示し、自然に寄り添う新しい表現を目指したベルギー印象派を紹介します。



エミール・クラウス「レイエ川を渡る雄牛」



エミール・クラウス「晴れた日」

学芸員の眼

前田育徳会の尊經閣文庫は、五代前田綱紀の収集による文書・典籍等がその骨格をなしています。綱紀には、座右において折にふれて書き込んだ雑記帳「桑華字苑」(主として語彙や文字に関すること)と「桑華書志」(書物に関すること)があわせて八三冊・三帖あります。そのなかに『水左記』を宝永五年に模写させたことが記載されています。また、綱紀と京都の公家、寺院、武家、学者など様々な人々との往復書簡を整理分類してまとめた「書札類稿」があります。その内容は、図書に関する問い合わせが多く含まれており、現在国宝の『水左記』は、当初は中院家から修復の目的で借り出したことがわかります。このように綱紀の「学ぶ」ことへの深い探究心の成果ともいえるべき貴重な作品との出会いが、鑑賞者の皆様が何かを「学ぶ」機会となれば幸いです。

恒例の尊經閣文庫の名品を紹介するシリーズ展示で、今回は平安時代後期の公卿、左大臣源俊房(一〇三五～一一二二)自筆の日記『水左記』を公開します。『水左記』の名称は、源の偏「水」と左大臣の「左」を合わせたものですが、別名として、家名の「土御門」より『土記』『土左記』や、邸のあった「堀河」より『堀河左府記』とも称されています。現在、康平五年(一〇六二)～応徳三年(一〇八六)に至る間と、嘉承二・三年(一一〇七・八)が残されていて、俊房自筆本は八巻が伝存し、宮内庁書陵部に六巻、前田育徳会に二巻が所蔵されています。他に記録の少ない後冷泉天皇・後三条天皇・白河天皇三代にわたる時代の宮廷社会を簡潔に記述しており、その資料的価値の高い記録です。また、能書家としても著名な俊房の筆跡を伝える貴重な作品でもあります。前田育徳会本二巻のうち、一巻は承暦元年(一〇七七)の秋冬(九月～十二月)の巻で、もう一巻は永保元年(一〇八一)の

秋冬の巻です。前者は、俊房が四十三歳、正二位権大納言の時であり、疱瘡の流行や、法勝寺金堂・阿弥陀堂の落慶法要などが記載され、後者は、俊房が四十七歳、正二位権大納言兼太皇太后宮大夫の時であり、興福寺、延暦寺と園城寺の対立など寺院間の闘争の激化といった時代の様相が記載されています。いずれも具中暦(平安時代に広く用いられた漢字の暦本。暦日の下に星宿・干支(えと)・吉凶などを注記。日ごとに二・三行の余白を設けてあり、公家らが日記として利用。)に記載され、記事が長い場合は紙背にまで記載されています。なお、国宝『水左記』は二十年ぶりの公開です。二巻を巻替えをしながら全期間を通して展示いたします。そのほかに公家の日記として、平安時代の藤原実資の『小右記』(重文・鎌倉時代の模写本)、武家の日記として鎌倉時代の太田康有自筆『建治三年記』(重文)などもあわせて紹介します。

みる・きく・かたる

7月25日(木)～9月9日(月) 会期中無休

学芸員の眼

お気づきの方はいらしたでしょうか？夏休み親子で楽しむ美術館の展示では、昨年までの二年間、それぞれのテーマでイメージキャラクターが存在しています。一昨年の「さがしてみよう」では、虫眼鏡を持ってまでよくみている男の子、「みるみるくん」。昨年の「きこえてくるよ」では、耳に手を当て聞いている男の子の女の子「きくちゃん」です。そして、今年のキャラクターは、人差し指を立てて一生懸命語る男の子「かたろうくん」です。今年の夏休み親子で楽しむ美術館のテーマ、「みる・きく・かたる」は、ここ三年間の展示の総集編。この三人のキャラクターが勢揃いし、展示室会場の雰囲気づくりや展示を見ていただくご案内役をつとめてくれることでしょう。

美術館での作品鑑賞が初めての方にも気軽に鑑賞いただける、「夏休み親子で楽しむ美術館」。この展示室では、作品や作者についての解説を聞くなどの知識を学ぶ受け身な鑑賞ではなく、鑑賞いただく皆さんの作品をみて感じる心に重点を置き、能動的な参加を通して作品への興味を持つてもらおうと鑑賞方法を提案しています。今年の「夏休み親子で楽しむ美術館」のテーマは、『みる・きく・かたる』。一昨年は『さがしてみよう』のテーマで、さがすという活動を通してよくみることを、昨年は『きこえてくるよ』のテーマで、作品から感じる音やセリフを想像する作品からきくことを体験していただきました。そして、今年は人をテーマにした展示室で、作品をよくみて、登場人物の声に耳を傾け、さらに、その登場人物に語りかけてみようという内容です。

展示室での具体的な鑑賞方法をご紹介します

まず、展示室で好きな作品を見つけましょう。まずは、展示室で好きな作品を見つけてみましょう。好きな作品を見つけることは、作品の世界に入り込み、展示を楽しむ第一歩となります。その作品をよくみて、どんな場面か考え、鑑賞される方の想像力で作品の登場人物のセリフを考えたりして、その人物の気持ちになってみます。最後は、鑑賞者の皆さんが、その登場人物に語りかけてみます。皆さんの作品への語りかけを書くカードをご用意し、展示室内のボードに貼ることが出来る参加型の展示となっています。作品への語りかけをそれぞれの心のつばやきで終わらせず、交流できる一味違った展示室をお楽しみ下さい。

さあ、この夏、美術館で作品の登場人物たちと対話をしてみませんか？



「赤とんぼ」坂 坦道



「舞台裏」南 政善

第5展示室

石川の工芸Ⅱ

7月25日(木)～9月9日(月) 会期中無休

今回は春の展示に引き続き、石川県にゆかりのある工芸作家を集集します。石川県といえば江戸時代から続く、豊かな文化的背景のもとで育まれた伝統工芸で知られており、県内在住の工芸作家たちは、受け継がれた技術を磨きながら新たな表現を模索しています。中には工芸作品特有の素材感と、絵画や彫刻などに通じる、造形性を併せ持つ作風を展開する作家も多く活躍しています。今回はこうした作品を中心に、その独創的な作品世界をご覧いただけます。展示作品の中から、金沢市在住の陶芸家久世建二氏の平成六年（一九九四）の作品「落下」をご紹介します。

この作品は、三角柱の土の塊を三つ、ある高さから落とし、その落としした行為から生まれた形を基本としています。塊は形を留めながらも、衝撃や重力による変形が見られ、土のままであればやがて崩れゆくものです。そのはかなさには幾分不釣り合いな、金属的で硬質な彩色が施され、一瞬をとらえた緊張感が漂います。柔軟性やあたたかみと同時に壊れやすさや冷たさをも内包した土という素材で、自然あるいは人間そのものを表現した作品とも言えるでしょう。



「落下」久世 建二

第2展示室

古九谷とその展開

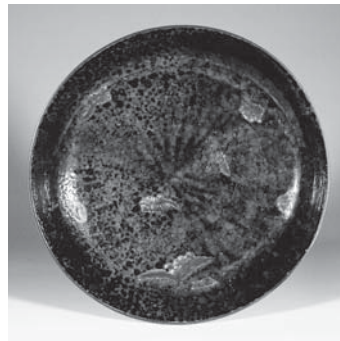
7月25日(木)～9月9日(月) 会期中無休

加賀藩三代藩主前田利常は、政治的に屈従を強いられた無念を晴らすかのように、文化政策において幕府に対抗心を燃やした大名でした。そして名品の収集や名工の招聘とともに利常が意欲的に取り組んだのが、江戸ではできない色絵磁器の生産でした。中国で確立された色絵磁器の技法は徐々に日本にも伝えられ、十七世紀にはいると本格的な生産体制が整備されていきます。前田利常は九州の有田地区の動向にいち早く注目し、人的交流によって技術の移転をはかり、やがて十七世紀半ば、加賀南部の九谷の地に色絵磁器の生産拠点を確立します。そしてそれから約半世紀の間に、今日古九谷と呼ばれている独創的な色絵磁器がそこで生産されます。

古九谷色絵の特質は、豪放華麗な意匠感覚にあ

ります。古九谷の色絵、青手の両様式には、中国の景德鎮五彩や華南三彩の影響が認められますが、意匠感覚は斬新であり、日本や中国のみならず、西洋の文物も熱心に参照しています。こうした姿勢が前田利常の文化人としての「好み」であり、また幕府に対する反骨精神の表明と考えることができます。このように、古九谷の意匠は加賀の文化風土と密接に結びついて誕生し、若杉や吉田屋など再興九谷諸窯にも継承され、さらに明治時代以降今日に至るまで当地の陶芸家の精神的支柱となっています。

本展は「古九谷とその展開」として、短期間に花開いた古九谷の独創的な表現世界と、再興九谷諸窯による継承・翻案の軌跡を、古九谷二十五点と再興九谷十一一点の展示によって概観したいと思えます。



石川県指定文化財
「青手桜花散文平鉢」
古九谷 江戸17世紀

第7～9展示室

第2回

日展石川会展

8月30日(金)～9月9日(月)
会期中無休(午後5時閉室)

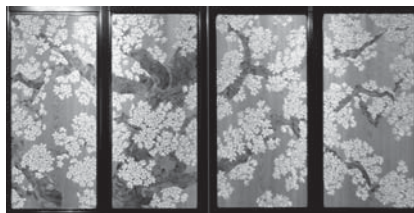
第3展示室

最後の絵師 勝田深氷

7月25日(木)～9月9日(月) 会期中無休

最後の浮世絵師と呼ばれた父、伊東深氷と洋画家小糸源太郎を師に画業に精進を重ね、昨年七月に急逝した勝田深氷氏(一九三七―二〇二二)。水野年方、月岡芳年、さらには歌川国芳へと遡る浮世絵派の系統に連なる画家といえます。また、サンフランシスコと本県珠洲市に活動拠点(勝東庵)を構え、日本文化の橋渡しにも精力を注いできました。

日本絵画の伝統的な技法や精神性を継承した氏の技術、作風そして画業は、現代画壇においては異質です。一芸に達し、それを生業とした意味で「日本画家」というよりは「絵師」という言葉のニュアンスが相応しいのかもしれませんが。公募展などを中心に中央画壇で活躍する同時代の画家たちと比べ、その存在はあまり知られてはいません。今回の小特集では、現代における氏の画業を、大小約三十点の作品から検証します。



勝田 深氷「桜心」(部分)

日展石川会は、県内在住の三人の日本芸術院会員をはじめとする日展所属の作家で構成されています。平成二十三年以来二回目となる今展は、昨秋東京の国立新美術館で開催の第四十四回日展に出品された大作を中心に百数十点を展示します。

◇入場料

八〇〇円(高校生以下無料)

◇連絡先

北國新聞事業局内「日展石川会」事務局
電話 〇七六一二六〇―三五八一

企画展 TOPICS

俵屋宗達と琳派

会期/九月十四日(土)～
十月十四日(月・祝)
会期中無休

琳派については、これまでに全国で様々な展覧会が開催されてきましたが、今回は総花的な展示とせずに対象を絞ります。展覧会の章立ては第一章を



俵屋宗達「子犬図」

俵屋宗達、第二章を俵屋宗雪・喜多川相説、第三章を尾形光琳と作家ごとの分け、第四章に関連展示として前田育徳会尊經閣文庫分館の特別陳列「加賀藩と寛永文化」をあてます。そして第一章では宗達の法橋叙任前後と、本阿弥光悦との共同作業の節立てを行い、能楽や茶の湯に深い嗜みのあった宗達が、宮廷や醍醐寺の文化圏との関わりをとおして、どのように表現世界を深めていったかを概観します。そして、宗雪や相説、光琳がその世界をどのように受け止め、独自性を打ち出したのかというところから「琳派」を捉え直してみたいと思います。

また今回は、作品にこめられた深意の解明に挑みます。『法華経』、和歌、謡曲、能楽書、禅語など、宗達や光琳が活動した文化土壌を手掛かりに、これまであまり顧慮されてこなかった新たな魅力として、作品の内面に光を当てます。

このように、本展は地方公立美術館ならではの軽いネットワークを活かした対象の限定、コンセプトの深化が最大の見所となっています。本展を機会に、是非新しい琳派の世界を発見していただきたいと思えます。会期中に開催する、ミュージアム・コンサートや土曜講座などの関連イベントも充実しています。

なおミュージアム・コンサートは好評につき、応募期間を8月6日(火)必着までとし、抽選で入場整理券を発行します。応募は希望者一名につき、往復ハガキ一通でお願いします。詳細は前号の「美術館だより」をご覧ください。

国宝 薬師寺展

ユネスコ世界遺産「古都奈良の文化財」のひとつ、薬師寺を「紹介した「国宝 薬師寺展」は九万人を超える鑑賞者を集め、開館以来二番目のご入場をいただいで、大盛況のうちに終了しました。会期前半は控えめでしたが六月に入って急進し、最後の一週間は三万人近くが来場されました。

今回展覧会を開催できたのは、一つには薬師寺で東塔の解体修理が行われており、その事業をひろく知っていただくこと、二つ目に北國新聞創刊一二〇周年、三つ目として石川県立美術館開館三〇周年の記念という特別な理由によるものでした。そこで初めて実行委員会を組織し、それぞれに役割を分担して大型の展覧会にこぎつけました。

薬師寺の特別なご配慮により、国宝六件を含む四十四件の文化財を五十九日間という長期にわたって公開しました。なかでも吉祥天女像は、本展の会期だけで年間の公開日数制限を上回ったことから、薬師寺恒例の春・秋の特別公開には出品されなくなりました。お寺では「吉祥天女像は金沢でご覧ください」と案内されたそう、出開帳に対する薬師寺の強い意気込みが感じられました。

本展の特徴は会期中、何度も鑑賞に訪れる方が目立ったということでした。新聞などで新知識を得られて、それを確認するために再度来られる方をはじめ、五回以上という方をずいぶん見かけました。また、車椅子を利用されるお客様が大勢いらっしゃいました。天武天皇がお後の病氣平癒を祈願して建立された薬師寺。その思いが、今の時代にも通じているようでした。



第四十四回

文化財現地見学(予告)

今年度秋の現地見学旅行は、「国宝 薬師寺展」にちなみ、十月五日(土)・六日(日)に一泊二日で奈良県を訪れる予定です。「国宝 薬師寺展」をご覧になり、奈良県へ足を運ぼうと思われた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。この現地見学では明日香村と奈良市西ノ京を巡り、飛鳥く奈良時代に至る歴史文化に触れていただきたいと思います。お待ちしております。

主な見学先は薬師寺をはじめ、飛鳥寺、橘寺、唐招提寺、秋篠寺などを予定しています。

詳しい内容、募集要項については次号の美術館だよりでご案内いたします。

八月の行事予定

<p>■ビデオ上映会</p>	<p>午後1時30分 美術館ホール 入場無料</p>
<p>4日(日)</p>	<p>世界・美の旅3 くモノ 印象派の巨匠く(30分) 世界・美の旅4 くマネ 落選した名画く(30分)</p>
<p>■キッズプログラム</p>	<p>午後1時30分 2階ロビー集合 参加無料</p>
<p>11日(日)</p>	<p>夏休み特集展示「みる・きく・かたる」鑑賞会 みる・きく・かたろうくんになろう</p>



重文 俵屋宗達 「舞楽図」 醍醐寺蔵



重文 俵屋宗達 「扇面貼交図」 醍醐寺蔵



重文 尾形光琳 「槇楓図」 東京藝術大学大学美術館蔵



国宝 俵屋宗達 「連池水禽図」
京都国立博物館蔵

次回の展覧会 会期:9月13日(金)~10月14日(月・祝)

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室	第3展示室	企画展示室 俵屋宗達と琳派 会期: 9月14日(土)~ 10月14日(月・祝)
加賀藩と寛永文化 —本阿弥光悦と前田家—	琳派 様々な表現	鴨居 玲 — 蠢く —	
第4展示室	第5展示室	第6展示室	
石川の作家たち	工芸品に見る秋草	日本画 女性美十色	

ご利用案内

コレクション展観覧料
 一般 350円(280円)
 大学生 280円(220円)
 高校生以下 無料
 ※()内は団体料金
 毎月第1月曜日はコレクション
 展示室無料の日(8月は5日)

今月の開館時間
 午前9:30~午後6:00

カフェ営業時間
 午前10:00~午後7:00 年中無休

8月は無休で開館しています

広告

毎週水曜日は

Mei
カード

ポイント
プラスデー

Meiカード
通常ポイント

+ 3 %

ポイントプラス

※催事場、地階食品売場などご奉仕品は、通常通りのポイントとさせていただきます。詳しくは売場係員におたずねください。

MEITETSU
MIZA
めいてつ・エムザ

金沢・むさしが辻 TEL代表(076)260-1111
<http://www.meitetsumza.com/>
 10時~20時 ●地階レストラン街・書籍は21時まで

石川県立美術館だより
 第358号(毎月発行)
 2013年8月1日発行
 〒920-0963
 金沢市出羽町2番1号
 Tel:076(231)7580
 Fax:076(224)9550
 URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>